

現場の実践紹介

規範意識の芽生え・協同して遊ぶ

幼稚園教育要領改訂のポイントにつながる実践紹介



●事例の解説をいただいた先生

東京学芸大学附属幼稚園
副園長 赤石 元子



東京学芸大学附属幼稚園

「自己の発達」を主軸とした教育課程を編成し、「遊びと生活」「自然とのかかわり」「体験と表現」を重視した教育活動を推進している。武蔵野の緑豊かな大学キャンパス内に設立された小金井園舎は、2007年に創立50周年を迎えた。

園長 ● 増田金吾
所在地 ● 東京都小金井市貫井北町4-1-1

URL <http://www.u-gakugei.ac.jp/kinder/>

幼稚園教育要領の領域「人間関係」の改訂では、「規範意識の芽生えを培う」「協同して遊ぶ」「共通の目的を見いだす」などが挙げられました。これは、対人関係が築きにくい現代の子どもたちの変化に対応したもので、これからは人との関わりを深めていく過程をより重視した保育が求められると言えるでしょう。今回の改訂における、ねらい・内容および内容の取扱いに関わるキーワードは、実際の保育の場面ではどのように展開されているのかを具体的な事例から考えたいと思います。

現場の実践紹介



事例① 危ないから順番

4歳児 6月

5人のレンジャー隊の幼児が、園庭に基地を作り築山の斜面をすべって遊んでいる。すべり下りたところで、ススム、カイ、タカシがぶつかり、ススムが泣いてしまう。

ユウ 「大丈夫？」

ススム （泣きながら）「カイ君がけた」

カイ 「ぼくはやっていない。タカシ君が押した」

タカシ （困ったように）「ぼくだって痛かった」

カイ （タカシに向かって強い口調で）「わざとじゃないだろう！」

教師 （泣いているススムを起こしてケガのないことを確かめ）「危険ですね。レンジャー隊が事故です」（ススムに）「痛かったね」（タカシに）「タカシくんも痛かったね」

アキラ （この様子を築山の上から見て）「危ないから順番、順番にやればいい」

教師 「そうだね。順番、順番。」

カイ 「順番にしないとぶつかる。一本橋と同じだからな」（遊びが再開する）

アキラ 「ケガ人はここで休んでいてください。上る人はあちからです」（流れをつくった）

子どもが経験したこと

- ・友だちと同じ場で同じ動きをする楽しさ
- ・イメージをもち、友だちと一緒に遊ぶ楽しさ
- ・思いの伝えあいとぶつかりあい
- ・友だちの思いへの気付き
- ・新たなルールを見つけて遊ぶおもしろさ
- ・ルールにそって遊ぶ楽しさ



キーワード

教師との信頼関係・自信をもって行動する
規範意識の芽生え・協同して遊ぶ

事例1では、5人がレンジャー隊となり築山からすべり下りていましたが、ぶつかりあったことでトラブルが起きています。最初は自分の思いを言い合っていますが、遊びを続けたい気持ちから新たな遊びの決まりを生み出し、秩序ができています。このように友だちと遊ぶ楽しさを求めて主張する体験のなかで、順番まで待つ、ぶつからないように気をつけるというよう

に、自分の気持ちや行動を調整する力が育っていきま

す。
子どもが自分の思いを伝え、自信をもって行動できるのは、教師がわかってくれるという信頼感が基盤になっています。また、友だちと楽しく遊ぶために決まりを守る姿に、規範意識の芽生えや協同して遊ぶ姿を見ることができます。

事例② どんぐりと山猫

この事例は、5歳児の7月から12月まで連続した活動の流れを追ったものです。子どもたちが協力して作りあげた子ども会での「どんぐりと山猫」の劇への取り組みの過程を見ながら、「協同して遊ぶ」幼児の姿と援助について考えていきましょう。

5歳児 7月～12月

「このオペラのどんぐりのことだったんだね！」



♪とがったのがえらいんだよ
♪いいえ違います
丸いのがえらいのです

7月

(活動の様子)

オペラ「どんぐりと山猫」で遊ぶ

夏季保育で、大学生とともに「どんぐりと山猫」のオペラをする。「丸い」「大きい」などのどんぐりのグループにわかれ、それぞれ自分のグループがえらいと歌いながら「どんぐり」同士が競い合う。

子どもが経験したこと

- ・歌に合わせてストーリーが進む面白さ
- ・大勢で体をふれあって動く楽しさ
- ・オペラ「どんぐりと山猫」の曲のおもしろさ

私たちは「おおきい」グループ

何だか先生楽しそう。何をしているのかな？



9月

(活動の様子)

竹の音を楽しむ

レンは竹の筒(トガトン)を打ち、その音を聴いたり歩く動作と合わせて打ったりして楽しんでいる。そこへアキオが来て並んで打ちはじめ、次第にリズムが重なっていく。その側でオサムは竹を割って作った木琴を叩いている。

七頭舞(ななずまい)に合わせて

その日の午後、「七頭舞」(豊作を願う舞踊)の笛を吹く大学生が幼稚園に来ると、幼児がその笛に合わせて、自分たちで育てている稲の田んぼの周りで「七頭舞」を舞い始める。レンは打つ場所によってトガトンの音が違うことに気づき、土やゴムマットでも打っている。

子どもが経験したこと

- ・音の響きの美しさや打ち方による音の違いのふしぎさ
- ・音の重なり合いと気持ちのつながりの心地よさ
- ・音と体のリズムが響き合う心地よさ
- ・友だちのすることへの興味と自分から参加する楽しさ
- ・自分の興味を追求する喜びや探求心
- ・「田んぼ」の体験と七頭舞を重ねて表現する喜び

10月

(活動の様子)

どんぐりに親しむ

園庭にたくさんのコナラの実(以下、子どもたちの呼び方で「どんぐり」と記述)が落ちる。子どもたちはどんぐりを拾っては「こっちが大きい」「ちがうよ、こっちがえらいんだ」などと、「どんぐりと山猫」のオペラの歌を口ずさんでいる。拾ったどんぐりで、どんぐり染めをしたり、自分だけのどんぐりの絵を描いたりした。

子どもが経験したこと

- ・「どんぐり」をきっかけに楽しかった経験を思い出す
- ・経験を共有する楽しさ
- ・どんぐりの色や形への興味と表現する喜び
- ・友だちや教師のしていることを自分もやってみようとする意欲とつながり

7月のオペラのことを覚えているんだな…みんなで歌を歌ってみようかな…

もっともっとなんぐりに親しめないかな



(保育者の思い・言葉)

♪いいえ違います
こっちの方が大きいんです



こっちの方が大きいよ

どんぐりが身近なものになってきたな…



(保育者の思い・言葉)

園庭のどんぐりの木の下でオペラの歌を歌ってみては？

かかしも作ろう



いっぱい集まった



シイの実ってどんな味？



どんぐり染めはどんな色？



私が一番好きなどんぐり



11月

(活動の様子)

グループごとの活動が始まる

園庭のどんぐりの木の下で「どんぐりと山猫」のオペラの歌や体の表現を楽しむ。これを子ども会で見せることを教師が提案すると、レンはすぐに「竹でどんぐりの音を出したい」と言い、音楽の得意などんぐりグループをつくった。また、踊りが好きなグループは衣装を整えて「七頭舞」を練習する。話すことが得意なグループはナレーターを務めるなど、それぞれが自分のやりたいことを明確にもち、役割をもってグループごとの活動が始まった。

私は、
こんなどんぐり!

ぼく、
こんなどんぐり!



劇ごっこに、
日頃楽しんでいる
遊びを取り入れられ
ないかな

思い切り動いたり
踊ったりして
楽しんでいるな。
次は
どうなるのかな…

子どもが経験したこと

- ・学級としての共通の目的をもち、その目的に向けて自分の目当て、役割をもつ
- ・共通の目的をもち、協同して活動を進める
- ・分担することと協力することで一緒に作りあげていく喜びを感じる

(保育者の思い・言葉)

仲間同士で動きを
考え出しているな…
楽しんでいる仲間の
遊びが活かされて
いるな

ぼくたち、
こんなに背の高い
どんぐり!



私たち、
こんなに
おおきいどんぐり!



現場の
実践
紹介

事例② どんぐりと山猫

キーワード

体験の関連性・共通の目的を見いだす

事例2では、夏季保育で「どんぐりと山猫」のオペラに参加した体験が、一人ひとりの子どもに深く残ったことがきっかけになっています。幼稚園ではもともと体験を重視してきましたが、今回の改訂で示された一般的な留意事項(4)(p.6参照)にもつながっています。さらに、オペラの体験は「トガトン」という楽器や「七頭舞」などとの出会いとあいまって一つの活動に発展し、この活動に興味をもった子どもの活動がほかの子どもに伝わっています。一人ひとりの体験が

連続するだけでなく、子どもの間での連続も重要なポイントと考えられます。

この事例では、教師が「子ども会で発表しよう」と提案したことにより、子どものなかで共通の目的が明確になっているように思われるかもしれませんが、それまでの活動ですでに目的を共有して遊ぶ楽しさは生まれていたことが分かります。はじめに共通の目的があるわけではなく、共通の目的が生み出されるような体験を積み重ねていくことが大切です。

12月

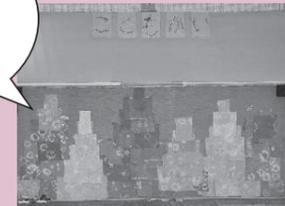
(活動の様子)

子ども会で劇を発表する

いよいよ子ども会の当日。各グループの活動で幼稚園全体がどんぐり山の雰囲気になってきている。物語も子どもたちの活動の内容にあうようにストーリーを一部変更して、自然な流れをつくり、新しい劇が展開された。

どんぐり染め
で作った
どんぐり山

自分たちで
描いたどんぐりで
つくった
どんぐりの木



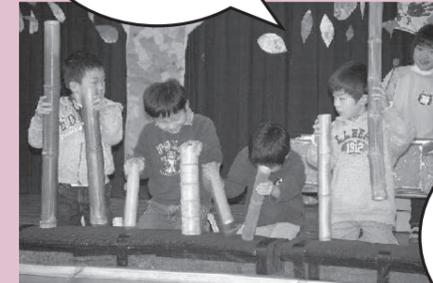
ぼくたちは、
音楽の得意な
どんぐり。
竹の音楽隊!

(保育者の思い・言葉)
幼稚園全体が
どんぐり山に
なってきた。
毎日の生活が
生かされているな

子どもが経験したこと

- ・自分らしい動きや楽しみ方
- ・友だちのよさへの気付き
- ・それぞれの力を発揮し役割を果たす喜び
- ・力を合わせて劇をつくりあげる喜び
- ・やり遂げた充実感

(保育者の思い・言葉)
ストーリーを一部
変更することで
自然な流れになったな。
みんな生き生きして
いるな…



ぼくたち
丸いどんぐりが
一番偉いんだ!



キーワード

表現する過程を大切にする・協同して遊ぶ

子どもたちは「オペラ」「トガトン」「七頭舞」など、自分の興味に応じて様々な取り組みをしています。教師はその取り組みを、竹の種類を用意したり、発表する場を提案したりするなど、発達の見通しをもちながら環境を整えることで温かく支えています。このことは領域「表現」の内容の取扱い(p.6を参照)に示されていることの実践そのものと言えるでしょう。

「協同する」ということは、単に一緒に活動を行うのではなく、一人ひとりの子どもが自分らしい動きや楽しみ方をして自己発揮することです。同時に相手のよさや楽しみ方に気づいて楽しさを共有し、そこに共通の目的が生み出されていくのです。

体験が共有されているからこそ、それぞれの主体性が活かされた協同性がはぐくまれていきます。

キーワード

共通の目的が実現する喜び

子どもたちは「どんぐりと山猫」の劇の実現に向けて、グループごとに共通の目的をもって活動しています。ここで大切なことは、一人ひとりの幼児が、その活動自体を楽しみ、自分らしく表現する喜びを味わっていることです。お互いの表現を受け止めあい、力を

合わせて一つのことを作りあげていく友だちの存在とつながりが実現の喜びの大きな要素ではないかと思えます。領域「人間関係」の内容の取扱い(3)(p.4を参照)に示されていることは、このような幼児の姿と言えるのではないのでしょうか。